

# 朝集殿院の調査

—第399次

## 1 はじめに

平城第399次調査は朝集殿院北半部における発掘調査であり、2001年度より続いてきた本地区における継続調査の最終年度にあたる。

朝集殿院の発掘調査は、1968年に実施された平城第48次調査にはじまる。この発掘調査では朝集殿院の東半に位置する東朝集殿の基壇を対象としたもので、礎石建物SB6000の規模ならびに構造が明らかになっている。その後、朝集殿院の北側にあたる東区朝堂院で発掘調査が進み、礎石建ちの各朝堂の基壇下において、その前身建物（掘立柱建物）が次々と検出された。このため、東朝集殿でも基壇下で前身となる建物の存否を確認する必要が生じ、第370・394次調査を実施した。

しかしながら、2005年秋の第394次調査により、東朝集殿SB6000の基壇下に掘立柱建物は存在しないことが判明した。よって、前身建物が存在するとすれば、その候補地は基壇周辺に求められ、ことに基壇西側の未確認範囲で調査をおこなう必要が生じてきたのである。

今回の調査では第394次調査地の西側に南北6m、東西36mの細長い調査区（以下、東調査区）を設け、引き続き東朝集殿の前身建物（掘立柱建物）の存否を明らかにすることを目的とした。また、朝集殿院北半中央部の状況を明らかにするため、朝堂院南門（第265次調査地）と第370次調査地との間に東西33m、南北26mの調査区を設け（以下、西調査区）、朝集殿院を縦貫する南北道路との関連遺構の調査もおこなった。調査面積は東調査区が約290m<sup>2</sup>、西調査区が約860m<sup>2</sup>で、合せて約1,150m<sup>2</sup>である。発掘調査は2006年1月6日より開始し、同年5月9日に終了した。

## 2 基本層序

朝集殿院は東区朝堂院のすぐ南側にあたり、整備以前の地目は水田であった。現在は整備盛土のため判然としないが、今回の調査区内ではいくつかの水田段差を確認している。こうした段差は第370次の西調査区でも確認しており、旧地形の勾配にしたがい南東方向へと緩やか

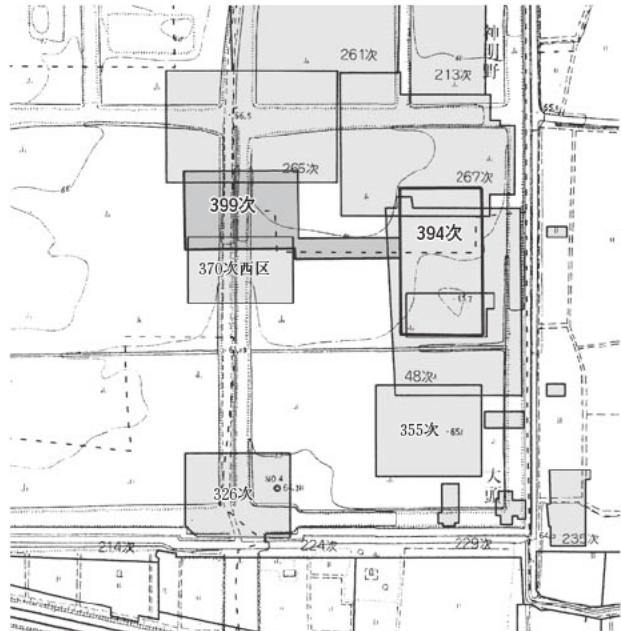


図156 第399次調査区位置図

に下っている。

第399次調査では、東調査区・西調査区ともに基本層序はほぼ同じであるが、水田段差の上下で層厚の変化や土層の欠落が認められる。土層の欠落が少ない西調査区東壁の層序（図158）では、上位から①表土、②整備盛土、③灰褐色土（旧耕作土）、④黄褐色土（いわゆる床土）、⑤暗褐色土、⑥にぶい黄褐色土（奈良時代後半の整地層）、⑦黄色粘土と続く。このうち、⑤は西調査区北東隅（SD18700以東）に限って残存した土層である。整地層にあたる⑥は削平を受けつつも広い範囲で残っていた。⑦はいわゆる地山であり、古墳時代の遺構はこの上面で検出した。

西調査区には南東方向へと下る水田段差があり、北部から西部にかけてのL字形の範囲が高い。この範囲では⑥の上面（標高64.2~64.3m）で奈良時代の遺構を検出できたが、これより一段低い南東部ではこの土層が薄いか、すでに削平されてしまっているため、⑦の上面で遺構を検出したところがある。西調査区の南東部における遺構検出面の高さは標高64.0m前後である。一方、東調査区では東朝集殿の前身建物となる掘立柱建物の存否を確認する目的から、⑦の上面まで掘り下げて遺構検出をおこなった。

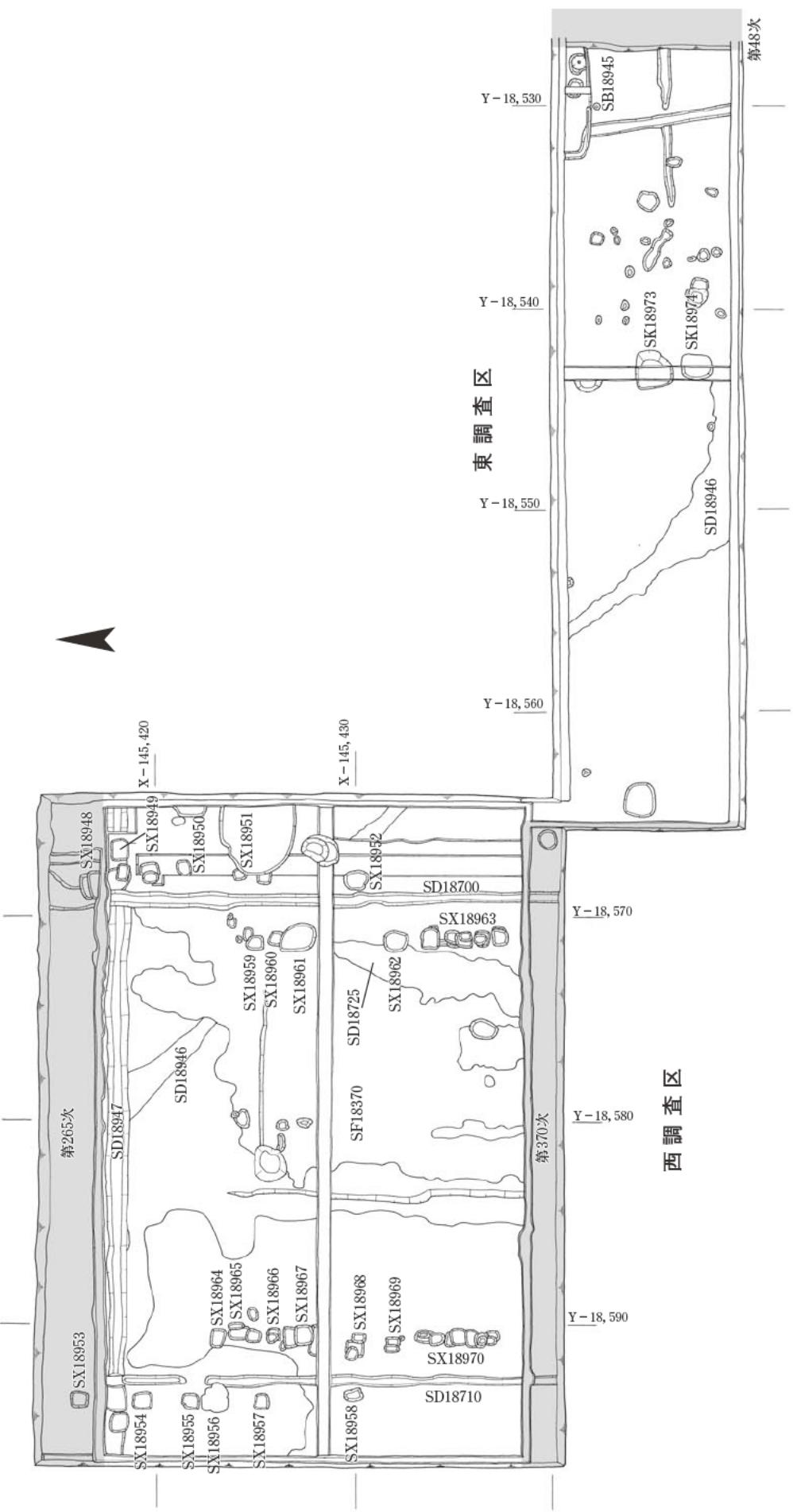


図157 第399次調査遺構平面図 1:300

### 3 東調査区

すでに述べたように、東調査区での調査は東朝集殿基壇西方に、その前身建物が存在したかどうかを確認するのが目的である。調査区は第394次調査地の西側にあたり、その東端部は第48次調査地と重複している。また、その西北隅で西調査区に接続している。

西調査区と同様に、奈良時代整地層の上面にて遺構検出をおこなったが、柱穴など奈良時代の遺構は認められなかった。そこでこの整地層を除去し、いわゆる地山の上面にて再度遺構検出をおこなったが、やはり奈良時代の建物遺構は発見できなかった。このことから、東朝集殿の基壇西方にその前身建物が存在した可能性は否定されたといえる。

#### 奈良時代以前

堅穴住居SB18945 東調査区の東北隅で検出した古墳時代の堅穴住居址。検出できたのは方形をなす住居址の南西部分で、調査区の北側へと続く。東側は第48次調査地におよぶが、古墳時代流路SD6030の調査時に深く掘り下げられて遺存しない。検出面から床面までは20cmで、壁際には幅15cm程度の浅い側壁溝がめぐる。橙褐色粘土の貼り床層（厚さ10cm程度）が認められる。床面では2基の土坑を検出し、東側の土坑は断面がすり鉢状を呈している。深さは約30cmで、下底部から小型丸底壺1個体が出土した。

斜行溝SD18946 東調査区から西調査区にかけて断続的に検出した北西-南東方向の素掘り溝。溝の幅は約1mで、残存する深さは10cmと浅い。埋土は灰色砂である。この斜行溝は西調査区の北辺中央部から南東方向へ続くもので、奈良時代の整地層に覆われる部分もあるが、整地層が残っていない西調査区の東壁付近で再び現れる。東調査区で検出した斜行溝はこの延長線上にあり、調査区の南へと続いている。西調査区のものと同一の斜行溝と考えられる。

#### 奈良時代以降

土坑SK18973・SK18974 東調査区の中央部で検出した2基の土坑で、南北に並んでいる。黄褐色土（床土）を除去した段階で検出した。SK18973は直径1.3mの楕円形プランで、深さは約0.7m。SK18974は長径1.2mの隅丸方形で、深さは約0.7mのすり鉢状である。両者ともに掘

形・抜取の識別はできず、奈良時代の建物遺構とは何ら関連性をもたない。なお、後者からは中世の土師器皿が出土している。

### 4 西調査区

西調査区は朝堂院南門のすぐ南側に位置し、朝集殿院の北辺中央部にあたる。調査区北側の第265次、南側の第370次調査では、朝集殿院を縦貫する南北道路とその関連遺構が検出されている。これら既往の調査では路面上で並ぶ穴が検出され、儀式の際に旗竿を設置するための穴と解釈されている。今回の発掘調査でも、これらの遺構の続きを検出し、朝集殿院北辺部の利用状況が明らかとなった。

以下、奈良時代の遺構は古い順からA期～C期に分けて述べる。

#### 奈良時代以前

流路SD18725 西調査区の南半中央部で検出した奈良時代以前の流路。第370次の西調査区で検出したのと同じ流路で、埋土は黒色のシルト～粘土である。西調査区の南半では、奈良時代の整地層が残存しない範囲で一部が露出している。東西畦の南側まで追跡できるが、これより北側では奈良時代の整地層に覆われるため検出できない。この流路は西調査区の東壁北端部にも現れるが、後述する東西溝SD18947がこれに重複する。なお、第265次調査地でも自然流路を確認しており、SD18725はこれにつながるものと考えられる。

#### 奈良時代（A期）

東西溝SD18947 西調査区の北辺にて検出した東西方向の素掘り溝。33m分を検出したが、さらに東西へと延び

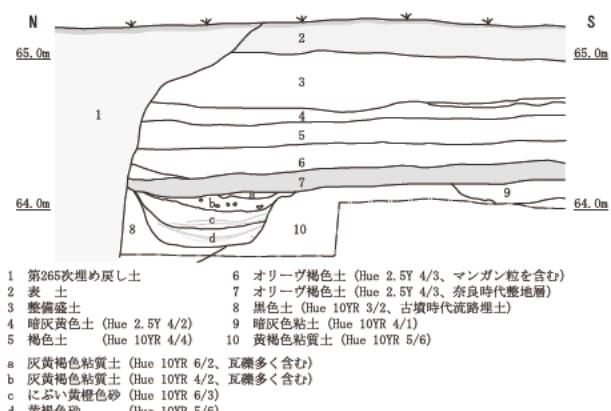


図158 基本層序と東西溝SD18947 1:50

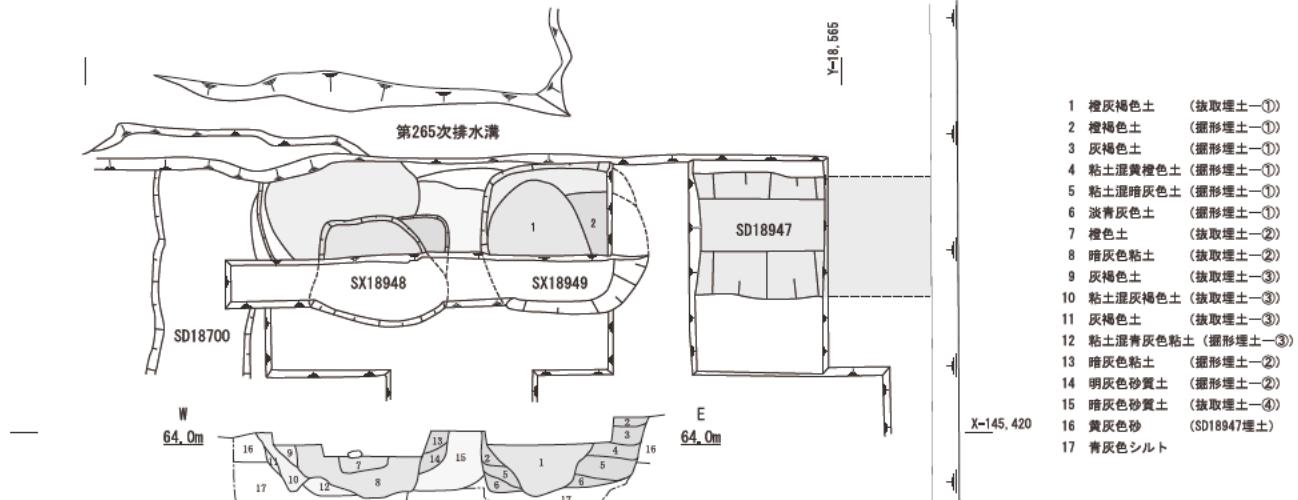


図159 SX18948・18949平面・断面図 1:40

る。第267次調査で検出した東西溝SD17350と同一の溝と考えられる。その幅は約1.0mで、検出面からの深さは約0.4mである。SD18947の北側には平行する東西溝SD16940があり、2つの溝は7.5m(25尺)を隔てている。なお、北側にある朝堂院南門の基壇中軸からの距離は18m(60尺)である。

SD18947の北縁は第265次調査地の南壁に接していたため、第265次調査ではこの溝の埋土を壁面にのみ現れる薄い土層と認識していた。また層位関係から、SD18947は後述の南北溝SD18700より古く、奈良時代の整地層に覆われる。

SD18947の埋土は大きく2層に大別できる。下層は主として粗粒砂～細粒砂からなり、流水環境にあったことがわかる。色調からは下部の黄色砂と、上部の灰褐色砂とに細分できるが、その境界は漸移的である。むしろ、こうした境界を超えて堆積物の上方細粒化が認められることから、2つの砂層を一連の堆積サイクルで理解することが可能である。一方、溝の上層埋土は瓦などの遺物や礫および偽礫を多く含む灰黄褐色粘質土であり、下層とは層相を異にしている。これらのことから、SD18947は水流が運んできた砂～シルトによって徐々に埋まり、最後には淘汰の悪い客土によって一気に埋め立てられたものと考えられる。

また、西調査区の東壁においてSD18947の埋土から試料を採取し、花粉・珪藻分析（これらの分析は環境考古研究会 金原正子氏に依頼した）をおこなったところ、周辺の植生・環境について次の知見が得られた。まず、最下層の

黄色砂（試料11・12）は樹木・草本花粉をごく微量含むのみで、灰褐色砂（試料9・10）でもその数は少量である。上層の暗灰色粘質土（試料6～8）では下層に比し樹木・草本花粉がやや多くなるが、総じて花粉は少ない。つまり、溝埋土の堆積期間を通じ、周間に樹木・草本類が繁茂していたことを直接に示す証拠はないといえる。また、珪藻分析では珪藻がほとんど検出されず、雨水などが一時的に流れる環境であったことを暗に示している。このほか、寄生虫卵はまったく検出されておらず、汚水が流下・滞水した形跡は認められなかった。

#### 奈良時代（B期）

穴列SX18948・18949 東側溝SD18700の東側に並ぶ南北方向の穴列で、旗竿穴とみられる。SD18947を検出するべく、調査区北東隅に残っていた奈良時代の整地層を除去したところで発見されたものである。SX18948は10尺で等間隔に並ぶ3つの穴からなり、その東側にはSX18949がある。いずれも東西溝SD18947より新しい。

穴SX18950～18952 SX18948の南に並ぶ穴。SX18948を検出できたことで、その南側にも同様の穴が並ぶことが予想されたため、整地層を1m幅で除去して検出した。

穴列SX18953・18954 西側溝SD18710の西側に並ぶ南北方向の旗竿穴。SX18948と同じく3つの穴が10尺間隔で並んでいる。真ん中の穴の西側にはSX18954があり、SX18948・18949と完全な対称をなす。両者ともにSD18947の埋土を掘り込んでおり、この溝より新しい。

穴SX18955～18958 SX18953の南側に並ぶ穴。東側で検出したSX18950～18952とおおむね対称をなす。SX18956

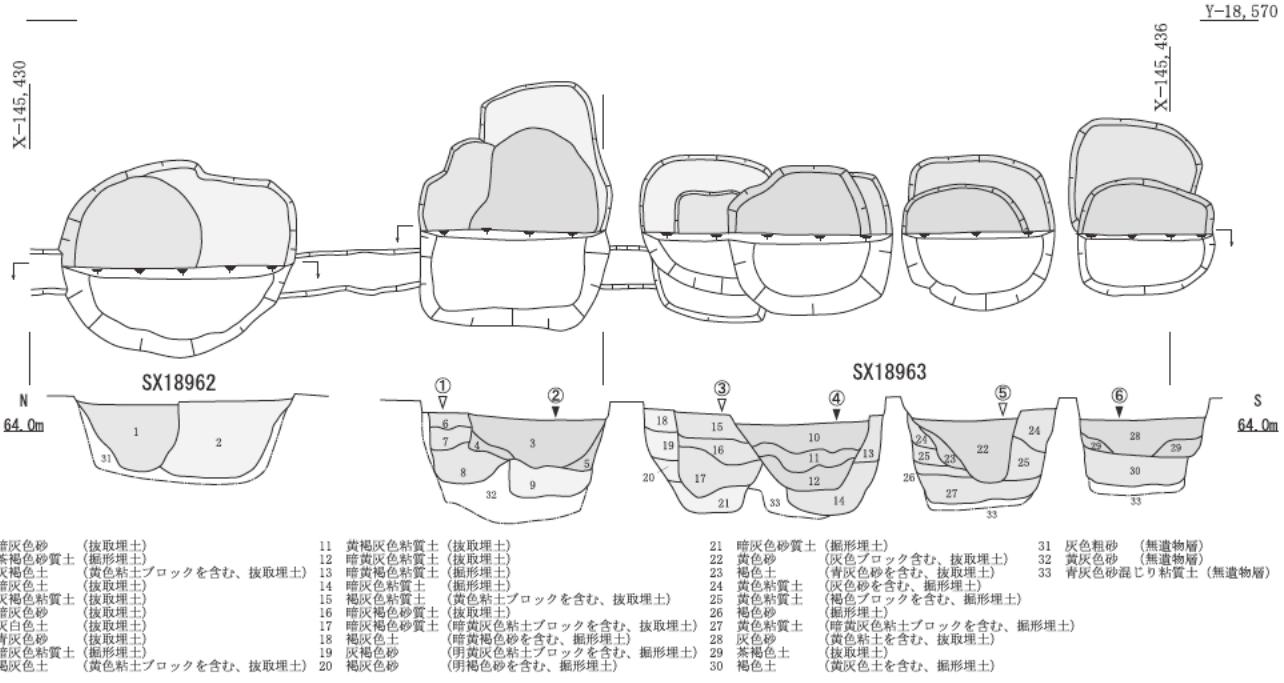


図160 SX18962・SX18963平面・断面図 1:40

からは6664F型式(神龟～天平年間)の軒平瓦が出土し、旗竿の設置された時期を示唆している。

### 奈良時代(C期)

南北道路SF18370 西調査区の中央部分を占める南北道路。路面幅は24mである。第370次調査に引き続き検出したが、路面は削平を受けており、舗装・礫敷は確認していない。

南北溝SD18700 道路SF18370の東側溝で、朝堂院南門から朝集殿院南門まで続く。今次調査の西調査区では、第370次調査西区の北側で約21m分を検出した。西調査区の北縁部では幅0.8m、検出面からの深さ約10cmをとどめるが、東西畦の南側では幅約0.6m、深さは約5cmしか残存せず、いずれにしても削平が著しい。埋土は灰色砂で、東西畦より北側では瓦が多く出土している。

南北溝SD18710 道路SF18370の西側溝で、西調査区の西部には奈良時代の整地層が残存しておらず、このためいわゆる地山上面で検出した。東側溝SD18700と同様に削平を受け、一部で途切れている部分もある。溝の幅は約0.6m、残存する深さは検出面から約5cmで、埋土は砂である。

穴SX18959～18963 道路SF18370の路面上で南北に並ぶ穴(東列)。SD18700の西側2mの位置にある。第370次の

西調査区では計7基を、また第265次調査でも3基を確認している。今回の調査でこれらの穴の続きを検出できたことにより、SF18370の路面上に旗竿穴列が間断なく並ぶことが明らかとなった。北から順にSX18959～18963とする。

東列はSD18700より西へ約2mの位置にあり、穴は不等間隔で並ぶ。このうち、SX18959・18962は隣接する穴との間に重複関係がなく、掘形と抜取が各1回の単独穴で、平面形は円形・隅丸方形である。これに対し、楕円形のプランをもち長径の大きいSX18961では、断割調査で掘形と抜取が2つ以上重複することを確認しており、旗竿の設置が少なくとも2度おこなわれたことを示している。SX18963は10尺等間で並ぶ3つの穴が2組重なり合ったもので、図160に示すように①・③・⑤と②・④・⑥とが組み合い、後者が新しい。

穴SX18964～18970 SD18710の東側2mの位置に並ぶ穴の列(西列)。北側の第265次で3基、南側の第370次西区で10基を検出しており、今回の調査でこれらの続きを検出したことになる。それぞれの穴は東列の穴とおおむね対称の位置にあり、穴同士の間隔はやはり一定しない。穴の配置や規模・重複状況が東列に類似しているが、東列に対応する穴をもたない場合もある(SX18968)。

表15 第399次調査出土瓦塙類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6129	A	1	6663	C	1
6139	A	1		?	1
6225	B	1	6664	F	2
	L	3	6688	Ab	1
	?	1	6721	?	1
6284	C	2	型式不明		5
6311	Aa	1			
	?	1			
型式不明		5			
軒丸瓦 計		16	軒平瓦 計		11
丸瓦		平瓦	磚	凝灰岩	
重量	76.4kg	311.2kg	0.3kg	2.4kg	
点数	987	4738	1	5	
道具瓦					
鬼瓦	3点	面戸瓦	1点	熨斗瓦	1点
ヘラ書丸瓦	1点	刻印平瓦	1点	道具瓦	2点

## 5 出土遺物

**土器** 第399次調査で出土した土器は整理箱10箱と少なく、朝集殿院の性格を反映している。また、包含層出土のものが多く、いずれも細片である。

**瓦類** 今回の調査では瓦類の出土量は少なく、その多くが奈良時代の遺構検出面より上位の包含層から出土したものである。奈良時代の遺構から出土した軒丸瓦・軒平瓦は、6284C (SX18949)、6664F (SX18956) が挙げられるのみである。

## 6まとめ

### ①東朝集殿前身建物の存否

今次調査の目的のひとつは、東朝集殿SB6000の前身建物（掘立柱建物）の存否を確認することであった。こうした目的のもと、東調査区での発掘調査を実施したわけだが、前身建物となるような掘立柱建物は検出されなかった。これまでに基壇周辺で実施された調査（第267次・355次）でも、掘立柱建物は見つかっていない。第394次調査の成果も勘案すると、掘立柱建物は東朝集殿の基壇下にも、また基壇西方にもなかったことがわかり、現状でその存在を肯定する材料は皆無である。

東朝集殿SB6000の基壇周辺には狭い未調査地が残っているが、そのような場所に掘立柱建物が存在したとはやはり考えがたい。基壇東方の未調査地は狭く、第48次調査地東端と朝集殿院の東を限る掘立柱塙SA18560との間隔は約7mにすぎない。また、基壇西南方にも未調査

地が残っているが、こちらは朝集殿院の中軸線に近すぎるであろう。つまり東朝集殿SB6000の前身建物（掘立柱建物）の推定地としては基壇西方が最も有力だったわけだが、そこで建物がみつからない今、前身建物は存在しなかった可能性が高いことになる。

現状では、奈良時代前半における朝集殿のあり方について、2通りの解釈が残っている。ひとつめは奈良時代前半における東朝集殿の存在を否定する解釈であり、もうひとつは基壇建物SB6000が、奈良時代前半から東朝集殿として存在していたとする見解である。しかし残念ながら、第399次調査の知見はいずれの解釈を探るべきここまでを示すものではない。

### ②旗竿穴列

西調査区中央部で検出されたC期のSX18959～18963・SX18964～18970は、朝集殿院の中軸付近でこれまでに検出してきたものと同じ性格の遺構であり、奈良時代後半の「旗竿穴」であったと考えられる。それらは朝堂院南門（第265次）にはじまり、今次の調査地および第370次調査地に続いている。また未調査地を挟むが、朝集殿院南門の門前（第326次）でもこれが検出されていることから、旗竿が南北道路SF18370の路面上に間断なく樹立されたことがうかがえる。

一方、今回の調査ではSF18370の外側でも旗竿穴SX18948～18952・SX18953～18958（B期）を検出し、新たな知見を加えることができた。これらの穴はSD18947より新しく、C期（奈良時代後半）の遺構より古い。また、SX18956の出土瓦には神龜・天平年間の軒瓦が含まれることから、年代の上限はこの頃に求めることができるであろう。

### ③東西溝SD18947

西調査区北端で検出したSD18947はA期の東西溝で、今次調査で確認した奈良時代の遺構の中で最も古い。水流が運んだ土砂によって半ば埋まり、最後には人為的に埋め立てられたものである。この溝の北側にも平行する東西溝SD16940があり、SD18947との間隔は7.5m（25尺）である。2つの溝はそれぞれが道路の北側溝・南側溝にあたるとみられ、朝堂院南門の南側に東西方向の道路があったことを示している。層位的関係から奈良時代前半の溝と考えることができ、この時期の朝集殿院の利用状況を考えるうえで重要である。  
(森川 実)